筒井新聞　第 354 号（2）

詩画集『見捨てられた牛』ができるまで

日本画家・戸田みどりさんは、福島県の〈希望の牧場・ふくしま〉へ通って、放射能被ばくのために病気になり、生死の境をさまよう牛たちの絵を近年集中して描いてこられた[1]。そして、国内外で展覧会を行われ、多くの人々の関心を集めておられる。この度標記の詩画集を出版される運びとなり、佐藤和宏と筒井哲郎がそのご協力をした。

3 月末にわれわれは福島県の浜通りで行われている除染廃棄物処理と廃炉技術の諸研究所を見学する用事があり、その機会に戸田さんが同道されて〈希望の牧場〉へ案内してくださることになった。

早春の晴れた朝、戸田みどりさんと 4 人の仲間が、1 台の乗用車に肩を寄せ合って、常磐自動車道を神奈川から福島に向かった。車中、やさしく優美な子供たちや水の動きを描いてこられた戸田さんが、なぜ突如として被ばくに苦しむ病牛とその死骸を直視し肉薄するようになられたか、という疑問が呈され、それにお答えくださった。ぽつぽつと語られた心情を、記憶をたどりながら再現して、このユニークな詩画集を手に取る方々のご参考に供したい。

＊　　＊　　＊

――戸田さんは、初めは誰が見ても目に美しいものを描かれていたのでしたよね。

「はい、わたしは美しいものを表現したくて、初めは子供の絵などを描いていたのですよ。それから動く水をあれこれ観察して、光と織りなす水の豊かな表情を捉えようとしたのです」

――まさしく水の絵は、水滴や流紋が鮮やかに表現されていますが、水をテーマにされるようになった経緯は何なのでしょう？

「エゼキエル書（第 47 章）に、『神ご自身から生ける水を流れ出させる』という啓示の情景が描かれています。水が湧き上がり、川となり、川が流れていくところどこでも命が芽生え、川の両岸の果樹が豊かに成長する。これらの言葉に感激し、水をテーマにした作品を制作し、『躍動する水』『Dancing Water』『Life Water（生ける水）』などのタイトルで作品を発表してきたのです」

――ということは、戸田さんの信仰が画業の背景にあるのですね。どういうきっかけで信仰の道に入られたのでしょうか？

「結婚して数年後に、夫の転勤でニューヨーク州ロチェスター市に住んだのです。そこで最

---

[1] 「病める牛たちの絵」『筒井新聞』第 346 号（1）
http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/346/346-1.pdf

初の子供に恵まれたのですが、生まれた当初虚弱であって、近所の方がたが親身の世話をしてくださいました。そのことが機縁でわたしもその方がたと同じ信仰を持つようになったのですよ」

――なるほど。そこでエゼキエル書に出会うわけですね。それがどうして鬼気迫る被ばくした牛の絵に取り組まれるようになったのでしょう？

「3.11 の津波と原発事故によって、水が津波という粗暴な濁流に変身し、また原発を襲って大事故を起こし、その後も汚染水となっていつまでも生きとし生けるものを苦しめていることを、否応なしに知らされました。そしたら筆が止まってしまったのです。水が人や生き物たちを生かすだけではなくて、命を奪い、大きな破壊をもたらすことを目の当たりにしてしまいました。これは一度被災地へ行かなければ、と思ったのです」

――その行き先が〈希望の牧場〉であったというのは出来過ぎのような気がしますが？

「隣町に小林恵さんという写真家がいらして、以前から親しくしていたのです。この方が、福島の写真をずっと取り続けておられました（2018 年に『フクシマ　ノート』という写真集を冬青社から出版）。この方が吉澤正巳さんを紹介してくださいました。牧場にはボランティアの方がたが寝泊まりするプレハブの小屋がありました。そこに泊めていただきました。夜はイノシシが出て危険だと言われていましたが、眠れぬままに朝 5 時ごろ起きだして外を歩いたら、牛さんたちが群れをなして牛小屋への道を私の方へ向かってくるのでした。踏みつぶされるかもしれないと思いましたが、人間たちがひどいことをしたのだからしょうがないとも思いました。身動きもできないまま、牛さんたちに、『ひどい目に遭わせてごめんね、ごめんね』と謝りました。そうしたら、わたしの体の幅だけをよけて、群れが通り抜けて行ってくれたのです。『牛さんたちはわたしを許してくれた』『牛さんたちの絵を描かなければ』と神様に襟首をつかまれたような気がしました。それから、放射線被ばくで皮膚がただれたり、かさぶたができたりした牛さんたちの絵を描き続けてきたのです。病気になってしまった牛さんたちの目の優しいこと！　美しいこと！　これを描きたかったのです」

（2019 年 3 月 31 日　佐藤和宏＋筒井哲郎・律子）

53